

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：21501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12032

研究課題名(和文) 移行にゆらぐ糖尿病患者に食卓の営みに着目した看護モデルを用いた援助の有効性の検討

研究課題名(英文) Investigating the effectiveness of using a nursing model focused on meal preparation activities for supporting patients with diabetes affected by the transition with diabetes

研究代表者

遠藤 和子 (Endo, Kazuko)

山形県立保健医療大学・保健医療学部・教授

研究者番号：80307652

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：食卓の営みに着目した看護モデルは、食卓のスケッチを描きながら、その食卓の営みを語ることで自らの生活を客観視することを助け、患者の内面的変化から糖尿病のセルフケア行動に向かうことを支援するものである。2型糖尿病中高年女性を対象に開発されたこのモデルを、合併症の進行や家庭・経済的な移行が複合的に生じてゆらぐ男性や1型女性を対象を広げて看護援助に用いた。その結果、それぞれが生活の営みとセルフケア行動が両立できる方略を見出すことができた。これより、このモデルが移行にゆらぐ対象への有用な援助方法の一つとなると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

糖尿病発症のピークとなる中高年の糖尿病患者のうち、糖尿病の進行と合併症や余病の発症に仕事や家族の変化が加わり、自分自身の気持ちも「ゆらぐ」ことで食事や運動などの自己管理行動に向かうことが難しい男女には、本人のみならず看護師も援助の難しさを感じてきた。今回有効であると確認された「食卓の営みに着目した看護実践モデル」を用いた援助は、患者に気持ちの切り替えと行動の変化を導き、援助方法の一つとなることを示すとともに、看護師の実践力の向上にも効果がみられた。この援助方法の活用は、これまで難しいとされてきた患者の自己管理行動の促進に貢献できると期待される。

研究成果の概要(英文)：A nursing model that focuses on meal preparation activities is used to support the patient's emotional changes and assist in the transition towards diabetes self-care behaviors by talking about meal preparation activities while making sketches of meals and objectively viewing one's life. This model was originally developed for middle-aged and elderly women with type 2 diabetes. Its nursing application was broadened to include men and women with type 1 diabetes who were affected by multiple transitions such as advanced complications along with family and financial issues. As a result, a strategy was devised whereby each patient was able to balance activities of daily living with self-care behaviors. This model may be an effective method for supporting patients who are affected by the transition with diabetes.

研究分野：看護学

キーワード：食卓の営み 糖尿病 移行 看護

1. 研究開始当初の背景

H25 年度の国民健康・栄養調査によれば、わが国の糖尿病が疑われる人の割合は、男性 16.2%、女性 9.2%であり、50 歳以降に割合が増えるとされている。この年代は、男女とも更年期を迎え、身体的に変化がみられると共に、社会的にも仕事上の役割や、子どもの独立、親の介護など家庭での役割の変化に直面し、老年期に向かう準備期として人生移行の岐路に立っている¹⁾。

糖尿病は、血糖コントロールにより合併症の発症を抑えることが重要であり、治療が進歩している一方で、特に発症初期の段階では、病を受け入れ適切な治療を継続してゆくことは難しい。それは必要とされるセルフケア行動が、生活者としての当たり前の行動に変化や調整を要求し、通常の生活をしていれば、周囲と折り合いをつけてゆくことを繰り返す、いわゆる生活の「編み直し」を必要とするからである。従来これは本人の自覚、意志の問題と言われ、医療者と共に治療に向かうための動機づけが重要とされてきた。

しかし、現実のセルフケア行動の一つ一つは、病の移り行きや人生上の重要なライフイベントや役割の変化などの「移行」に影響を受けるがために、周囲との折り合いのつけ方が一層複雑になる。

「移行」とは、移り行きであり、人生の四季や母子関係を取り上げた発達上の移行や、健康から慢性疾患を発症したことによる病の移行などが知られているが、Meleis は看護における移行を中範囲の理論モデルを開発し、発達、状況、健康/病、組織、と 4 つの性質を示した。その中で、健康状態、役割関係、予期、能力に変化を伴い、多様で複合的で、不確かさを伴うことがあり、連続、並行して起こることがあるとしている²⁾。

糖尿病患者の移行についての研究は、ここ数年で、合併症予防・対策への研究³⁾⁴⁾、1 型糖尿病患者の青年期の自立に向けた発達に関連したもの⁵⁾、が報告されてきた。

しかし現実外来で出会う患者は、腎症、網膜症などの合併症の発症とその悪化、がんや余病の発症など生命上の危機に関連した健康/病の移行、および、子どもの独立、親の介護など発達上の喪失・変化に直面する人生移行によりゆらぎを生じ、そのゆらぎのきっかけが重複している。

このとき、糖尿病のコントロールのために生活を変える必要に迫られてセルフケア行動を指導され、加えて、透析や失明を伴う場合には、生活上の変化と喪失も経験する。50 歳代前後の糖尿病患者はこれらの移行の局面に遭遇し、いやがおうでも人生の岐路に立つことに直面している。

これまで、2 型糖尿病の中高年女性を対象に、「食卓の営み」に着目した看護モデルを開発し⁶⁾、これを用いた援助プログラムを作成してきた (JSP 科研費 25463394)。

このモデルは、糖尿病患者の生活者としての側面から、女性の更年期の変化と喪失、人生移行に焦点を当て、「食卓の営み」についてスケッチを描いてもらいながら、心の内を語ってもらい、その語りを聴くことで、主に女性のジェンダー役割と糖尿病患者としての葛藤について、自己の内面の思いを浮かび上げさせ、自己を客観視し、内面の変化からセルフケア行動に向かうことを支援し、その結果、その人らしい生き方を見いだすことに向かうことを援助するモデルである。

「食卓の営み」は、それを語ることによって、家族と自分との関係を表現し、客観視すること

につながる。女性には女性のジェンダー役割としての担い方がある一方で、男性にも男性の担い方があることを、先行研究でも示してきた⁶⁾。

これより、「食卓の営み」に着目した看護モデルを、男性や 1 型糖尿病女性にも対象を広げ、腎症、網膜症などの合併症の悪化、透析、失明、がんやその他の疾患の発症などの、あらたな健康/病の移行に遭遇する、もしくは、職場の移動、役割の変化、子どもの独立、離婚、死別などの喪失、介護を担うなどの人生移行に直面し、ゆらぐ対象への看護方法として実践に活用できないかと考えた。

2．研究の目的

糖尿病の合併症の発症、がんや余病の併発など健康/病の移行や、家族の独立、介護などのライフイベントの変化からさらなる生活の「編み直し」を必要とする、移行に直面してゆらぐ糖尿病患者に「食卓の営み」に着目した看護モデル（遠藤,2012）を用いた援助の有効性を検討することである。有効性の検討は、実行可能性、援助の効果、汎用性の観点から行う。

3．研究の方法

援助対象者の選定：移行にゆらぎ糖尿病のコントロールのための生活調整が難しく、援助実践者にとっても療養指導が難しいと感じる患者。

援助実践者の設定：糖尿病療養指導 10 年以上の経験を積む糖尿病看護認定看護師 3 名と、糖尿病看護の研究者 1 名 計 4 名

援助方法：食卓の営みに着目した看護実践モデルを用いた援助とは、通常の糖尿病の療養指導に加えて、「食卓の営み」についてスケッチを描いてもらいながら、その語りを聴いてゆく。食卓を語ると、家族、仕事、地域で生活する際の人間関係、食物にまつわる思い出など様々なものが表出されて、語り手から見た生活実態の表現になりやすい。そのため、援助対象者は、食卓のスケッチを描きながらその内容を援助者に語ることで、自身の役割（主にジェンダー役割）と糖尿病患者としての葛藤について、自己の内面の思いを浮かび上がらせることができ、自己の思いを客観視できると、気持ちが整理されてゆく。その結果、これからの生き方が見出されてきたときに、食卓をきっかけに生活全般に視野が広がり、運動を取り入れるなど、セルフケア行動への取り組みが現実的になる。このとき援助者は、対象者自身の役割と糖尿病患者としての葛藤について、内面の思いが浮かび上がるように語りを「聴ききり」、客観視することを助ける。以上を援助方法とする。（図 1,2 参照）

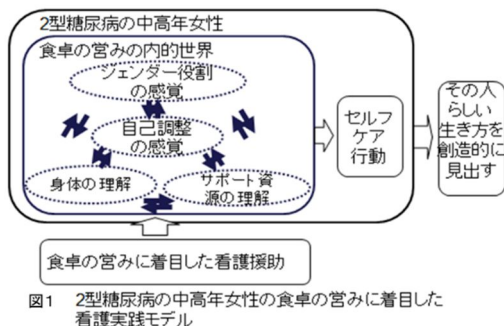


図1 2型糖尿病の中老年女性の食卓の営みに着目した看護実践モデル

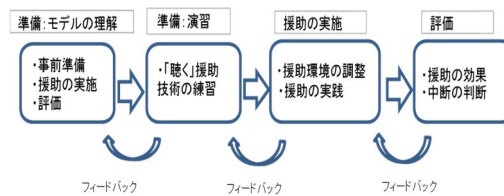


図2 食卓の営みに着目した看護モデルを用いた2型糖尿病中高年女性の援助プログラムのプロセス

データ収集：援助のプロセスを作成した記録用紙に記載し、援助対象者の変化を見た。

援助の質の担保：実践者の援助の質の担保を目的に、事例検討会を隔月に実施した。これには、遠隔通信システムを用い、全国各地で活躍する実践者が参加できるように便宜を図った。

倫理的配慮：援助対象者には、研究協力について強制力が働かないように細心の注意を払い、援助実践者が研究協力の承諾を得た。所属大学と援助実践者の所属する病院の倫理委員会で承認を受けた後に実施した（承認番号：1609-17，1903-33）。

4. 研究成果

1) 援助対象者：男女計7名に援助を実施した。全員が移行の渦中にあり、多重移行を呈した。糖尿病の発症を契機に、失明や仕事と家族の喪失、経済的困窮へと複合的に移行が進行した事例もあり、全員に自尊感情と自己効力感の低下がみられた。

表1 援助対象者

性別	年齢	生計	援助期間	病型	合併症・既往	移行の分類
a 男性	50代	会社員	2年	2型	神経障害、網膜症、腎症3期、アルコール依存	健康/病・合併症 発達・家族役割
b 男性	50代	会社員	1年	2型	網膜症、生体腎移植後	健康/病・合併症/移植
c 男性	40代	自営	1.5年	2型	慢性腎不全、脂質異常症、パニック障害	健康/病・慢性腎不全治療中DM発症、 発達・家族不和、組織・転職
d 女性	50代	主婦	1年	2型	網膜症、腎症Ⅰ期、卵巣摘出後	健康/病・合併症、更年期 発達・家族構成と役割
e 男性	50代	生活保護	4か月	2型	網膜症 腎症3b期 神経障害	健康/病・合併症、組織・失業、求職、 状況・生活保護のために家族と別居
f 男性	50代	無職	1年	2型	視野狭窄、右失明、腎症4期、 神経障害、下肢潰瘍・切断	健康/病・合併症、下降期 組織・失業
g 女性	60代	パート	1年	1型	網膜症、腎症Ⅰ期	健康/病・1型を受け入れられない 発達・家族構成と役割、状況・離婚

2) 援助の結果： 援助は、施設の了解を得て実際の診療における療養指導時に行われた。所要時間は、初回に30分～1時間を要し、2回目以降は30分以内に終了した。

援助の効果は、患者自ら食卓のスケッチを描きながら看護師に語ることで、内面の思いに気づき、これまで頑張ってきた自己も認め、今まで見えなかった周囲のサポートにも気づくように変化した。さらに療養指導で自己管理の知識を得ると、セルフケアへの意欲が見られ、姿勢や身だしなみ、表情にも変化が現れた。

また、食卓のスケッチを活用したことで、これまでスタッフの誰も知り得なかった食事内容を把握することができ、無自覚性低血糖の原因が食事にあったことが明らかになった事例や、援助終了1年後に追跡できた1事例もあった。追跡できた事例では、援助実践者と援助対象者が共にこの1年を振り返ると、援助対象者のセルフケア行動は、援助実践者の提案を自分なりにアレンジして取り込むことで継続されていた。並びに、対象者の内部で変化に結びつくきっかけは、援助実践者の想定するものとのズレが生じていた。これより、援助実践者のかかわりの評価として援助対象者の変化を見るには長期にみないと見えてこないものもあることが示された。

一方で、援助対象者の選定に困難を伴った。研究期間を当初予定より1年延長したが、協力辞退もあり対象者数は増えなかった。

3) 考察：今回の結果から、援助対象者が多重・複合的な移行を経験していても療養指導の時間内で援助がなされており、期間は7名中6名において1~2年であった。先行研究では援助期間が平均3~6か月であったことを踏まえると⁶⁾、多重や複合的な移行では生活調整もより困難さを増し、移行期間も遷延したとみることができる。この状況では対象者のゆらぎも長期化するため、対象者の疲弊と自尊感情の低下から療養指導もより困難となりやすいが、援助対象者にセルフケア行動への意欲が導き出され、生活の「編み直し」に向かったことで実践での実行可能性はあると考えられる。また、援助実践者のスキルアップにも効果を示した。援助実践者は糖尿病看護のエキスパートで元々の実践力があるものの、援助実践者からみて療養指導が難しいと感じる対象が研究開始当初とは年々異なって行き、より複雑な移行を経験する対象へと変化した。

汎用性の観点からは、本モデルは2型糖尿病中高年女性を対象に開発されたものであるが、多重や複合的な移行にゆらぐ男性や1型女性にも、合併症の併発や健康/病の移行、家族や役割の移行に直面する対象では有効であると考えられる。しかし、がんや他の慢性疾患の併発などでゆらぐ対象には適用できず、さらなる課題として残された。

【文献】

- 1) 山本多喜司、S.ワップナー編著、北大路書房、人生移行の発達心理学、1991、pp.15
- 2) Meleis, A.I., et al, Advanced nursing science, Experiencing Transitions: An Emerging Middle-Range Theory, 2000, Vol.21, No1, 12-28
- 3) Ye, Wen, Brandle, Michael, et al, Diabetes Technology & Therapeutics, The Michigan Model for Coronary Heart Disease in Type 2 Diabetes: Development and Validation, 2015, Oct, Vol.17, No.10, 701-711
- 4) Michele Polfuss, Elizabeth Babler, et al, Journal of Pediatric Nursing, Family Perspectives of Components of a Diabetes Transition Program, 2015, Vol.30, 748-756
- 5) Elizabeth Babler, Carolyn June Strickland, Journal of Pediatric Nursing, Moving the Journey Towards Independence, Adolescents Transitioning to Successful Diabetes Self-Management, 2015, Vol.30, 648-660
- 6) 遠藤和子、千葉大学大学院看護学研究科博士論文、2型糖尿病の中高年女性を対象とした外来看護援助 食卓の営みに着目した看護実践モデルの開発、2012、143

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藤澤由香, 遠藤和子
2. 発表標題 2型糖尿病の合併症が進行している中年男性に「食卓の営みに着目した看護モデル」を用いた援助の効果
3. 学会等名 第24回日本糖尿病教育・看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 有馬弥生, 遠藤和子
2. 発表標題 食卓の営みに着目した看護モデルを男性に使用した援助の一年後の振り返り
3. 学会等名 第24回日本糖尿病教育・看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩塚晶子, 遠藤和子
2. 発表標題 2型糖尿病の独身中高年男性に「食卓の営みに着目した看護モデル」を用いて移行によるゆらぎを考える
3. 学会等名 第24回日本糖尿病教育・看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 遠藤和子, 有馬弥生, 岩塚晶子, 藤澤由香, 井瀨奈緒美
2. 発表標題 移行にゆらく食卓の営みに着目した看護モデルを用いた援助の有効性の検討
3. 学会等名 第24回日本糖尿病教育・看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三浦幸枝, 遠藤和子, 藤澤由香, 井瀨奈緒美, 小泉麻美, 岩塚晶子, 由浪有希子, 有馬弥生, 菱野祐美加
2. 発表標題 移行にゆらぐ状況にある糖尿病患者さんが自分の生活を振り返ることを助ける看護について語ってみませんか
3. 学会等名 第24回日本糖尿病教育・看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 有馬弥生, 遠藤和子
2. 発表標題 移行にゆらぐ2型糖尿病の中老年男性に「食卓の営みに着目した看護モデル」を用いた援助の効果
3. 学会等名 第23回日本糖尿病教育看護学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井瀨奈緒美, 遠藤和子
2. 発表標題 移行にゆらぐ糖尿病患者に食卓の営みに着目した看護モデルを用いた援助の有効性の検討 腎臓病の療養行動が変化した中年期男性
3. 学会等名 第21回日本腎不全看護学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 遠藤和子, 井瀨奈緒美, 岩塚晶子, 菱野祐美加
2. 発表標題 食卓の営みに着目した看護実践モデルを用いた援助プログラムの作成
3. 学会等名 第22回日本糖尿病教育・看護学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 有馬弥生、遠藤和子
2. 発表標題 ある男性糖尿病患者の「食卓の営み」の語り
3. 学会等名 第22回日本糖尿病教育・看護学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 遠藤和子、藤沢由香、井瀨奈緒美、菱野祐美加、由浪由希子、小泉麻美、宅井さやか
2. 発表標題 「食卓の営み」から見える患者さんの思いを聴いてみよう
3. 学会等名 日本糖尿病教育・看護学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	藤澤 由香 (Fujisawa Yuka) (60711942)	岩手県立大学・看護学部・講師 (21201)	
研究協力者	岩塚 晶子 (Iwatsuka Akiko)	東京労災病院	
研究協力者	井瀨 奈緒美 (Ibuchi Naomi)	公立置賜総合病院	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	有馬 弥生 (Arima Yayoi)	原三信病院	
研究協力者	三浦 幸枝 (Miura Yukie)	岩手医科大学病院	
研究協力者	由浪 有希子 (Yoshinami Yukiko)	東北大学医学部付属病院	